

みんなでいっしょにぼんじん

土浦市立土浦小学校 一年 加藤彩花

わたしのおじいちゃんはいえは、土うらしのせんぞくちょうにありますが。わたしはがつこうからかえると、おじいちゃんはいえで、おかあさんのかえりをまっています。

いえのちかくには、さくらがわのどてがあつて、どうそじんといいさなじんじゃがあります。そこには、おおきなさくらのきと、いちようのきがあつて、さくらがさくとたくさんのひとがおはなみにきます。わたしも、おばあちゃんやおともだちといっしょに、おはなみをしたことがあります。

どうそじんは、うまやあしのかみさまで、むかしくるまやでんしやがなかつたころ、うまをたいせつにしたり、あしがいたいのがなおるように、おまいりするひとがおおかつたと、おじいちゃんがはなしてくれました。

それから、どうそじんのかみさまは、わるいれいがはいつてくるのをふせいでくれていると、ほんにのっています。

おじいちゃんとおばあちゃんといっしょに、おまいりにいくと、おみやには、たくさんのわらじやくつなどがおそなえしてありました。

じんじゃは、おおまのひとたちがたいせつにして、いつもきれいにしてくれているそうです。

いまは、おまいりするひとがすくなくなつてきたそうです。どてをさんぼするひとが、おまいりしているのを、ときどきみかけますが、もつともつとたくさんのひとがおまいりにくるといいなとおもいます。

はるになつて、どうそじんのさくらが、まんかいになったころ、おじいちゃんやおばあちゃん、おとうさんおかあさん、それからおともだちをさそつておはなみにいきたいとおもいます。

悲しい「しゃぼん玉」

古河市立名崎小学校 六年 清水稜太

「しゃぼん玉」という歌は、誰もが一度は口ずさんだことのある、とつても親しみのある童ようだと思ひます。ぼくも幼少期の頃、よくこの歌を歌つて、楽しくしゃぼん玉を飛ばした覚えがあります。この「しゃぼん玉」という歌は、いつけん、明るい歌のように聞こえますが、実はこの歌は、とつても悲しい歌なのだという事を知りました。

この「しゃぼん玉」という歌は、野口雨情という人が作詞したのだそうです。雨情の出身地は現在の北茨城市で、明治十五年五月二十九日、本名英吉として誕生したそうです。十五歳で上京し、その後二十二歳で結婚して、二十六歳の時に長女みどりが誕生しました。しかし、生後まもなくこのみどりは死去してしまいました。雨情はこの時、仕事の都合で家族とはなれて暮らしていたため、我が子の死に目に会えませ

んでした。知らせを聞いた雨情は、気が狂った様に大声で泣きさげびながら、海岸を走り回ったそうです。そんな中生まされたのが、この「しゃぼん玉」だそうです。はかなく消えてゆくしゃぼん玉を、亡き我が子にみため、我が子をしのぶ思いで作ったにちがいありません。結婚後初めて誕生した我が子を亡くし、どんなにかつらくて、くやしかった事だろうと思います。

雨情の歌には、この「しゃぼん玉」の他にも、「赤いくつ」や、「七つの子」などがあります。これらもみな、亡き我が子の事を歌った童ようのようです。不思議なことにこれらの歌は、楽しく歌えば楽しい歌なのですが、雨情の心情を思つて歌うと、とっても悲しい歌になります。本当に不思議です。

人は、幸せな時に生み出す歌よりも、むしろ、悲しみのどん底にいる時に生み出す歌の方が、より人々の心にひびくことのできる、すばらしい歌を作る事が出来るような気がします。

野口雨情という人は、これらの悲しみやつらさがあつたからこそ、この様に、後世に受けつがれてゆくすばらしい童ようを、残すことが出来たのだと思います。こんな身近な童ようを、茨城県出身の人が作つたなんて、おどろいたと同時に、うれしくも思いました。そして改めて、「しゃぼん玉」の歌の意味に感銘しました。

七会の八木節源太踊り

城里町立七会中学校 一年 小滝万結

「そおれハッ！」

というかけ声を合図に、太鼓と篠笛が鳴り出し、歌い手が歌い、そして笠を持った大人や子供達が、音頭に合わせて踊り出す――。

これが、私達の住む下赤沢に伝わる伝統的な踊り、「八木節源太踊り」である。二年に一度の夏に、下赤沢にある鹿島神社でお祭りをやる時に一緒に披露するのだ。その年がやってくると、私達は夜集まって練習をする。私は結構この「源太踊り」が好きで、二年に一度が待ち遠しい。踊りにも種類があり、「新笠」、「安笠」、「流笠」、「車笠」、「双笠」、「弓張傘」など、学年が上がるごとに自分の踊れるレパートリーも増え、それも楽しみの一つだ。踊り子の対象は、小学校一年生からで、小さな一年生が体に合わない大きな笠を持って一生懸命に踊っている所を見ると、とても可愛い。また、大人の男の人達も踊る。弓張傘などは、普通の笠とは一味違う、面白いものが見られる。とても格好よく、私が一番憧れるのがその「弓張傘」だ。また、歌い手やおはやしなどをやる人達も全員男の人達である。迫力があって、聞いていてとても楽しい。

今年がちょうど二年に一度の祭りの年で、夏休み少し前から練習をすることになった。週二回、一時間の練習を続けて、私も踊れる種類が少し増えた。

本番を迎え、衣装に着替えるが、これもまた楽しい。ハッピを着て帯を締め、ハチマキをしてから化粧をする。ファンデーションで白くされた顔には、次々とお手伝いのお母さん達の神の手により、口紅、アイシャドウなどがぬられ、仕上げには、ハクビシンのように鼻に白い縦の線が描かれ、出来上がりである。準備が終わると神社に移動する。暗くなりかけた神社には灯りがとまり、とても幻想的な眺めとなる。神社は森の中にあるため、余計に感じが出て、まるで映画の中の世界を思わせるかのようになる。

そして私達は舞台の裏にスタンバイし、開演がきたら発表だ。始まる前はものすごく緊張していたが、終わってみれば、大きな拍手と共に清々しい気分です。舞台を後にできた。また、お祭りなので屋台も出て、クジ引きをやったり焼きそばを食べたりと、とても楽しめる。

しかし、今年のお祭りは悪天候で、急ぎよテントを張って行われた。それでも楽しさは変わらず、とてもいい思い出となった。

また、今年から、隣の地区の上赤沢の人達とも一緒に行事を行うことになった。同じ「八木節源太踊り」を共有して、地区同士でもより一層親ほくが深まったことと思う。そうして、この「源太踊り」が広まっていくのも嬉しい。

次にやるのは再来年。私は中学三年になっていて、受験勉強などで忙しくなっているかもしれないが、できればまた「源太踊り」をやりたい。この伝統的な文化が好きだし、なにより誇りに思っている。大人になっても絶対に忘れないだろうし、忘れたくない。一生心に残るだろう。そして、自分の

子供や孫にもこの話をしてあげたい。今の世の中は、前へ前へと進みすぎて、昔を振り返ることが少なくなっている。まっすぐに進んでいると思う。前に進むのもいいけれど、たまには後ろを振り返って、伝統的なものに触れてみるのも面白いのではないだろうか。どんなに時代が進んでも、人々の記憶の片隅にはいつでも、このような行事が残っていてほしい。

わたしのまちの宝探し

県立水戸第三高等学校 二年 高畑 佳代子

私は茨城県の那珂市瓜連に住んでいます。瓜連町は、那珂市と合併する前は、非常に小さな小さな町でした。そんな小さな町だからこそ、人と人の繋がりはとても深くなれるのだと思います。

私の住んでいる町の良い所は、やはり人情の温かさに満ちあふれている所だと思います。朝、学校に登校する時も、何人もの人に、

「行ってらっしゃい。気をつけてね。」

と言うような言葉を何度もかけてくれます。それだけで何だか心が温かくなる気がします。夜、遅くなって学校から一人で家に帰ってたような時も、散歩中のおばさんが、

「危ないからそこまで一緒に帰ろっか。」

などと声をかけてもらったこともあります。そんな時は、のどかで良いなあ。と感じます。

私が困っていた時も、町の人達は本当に親切に接してくれ

ました。例えば、私の自転車のチェーンが切れてしまった時、一人でおろおろしていたら、軽トラックに乗っていたおじいさんが、自転車屋まで連れて行ってくれたこともあります。この様に私は何度町の人の親切に助けて頂いたか、数えどもきりがありません。その度ごとに日々、我が町への親しみが私の中で増していく一方です。

私の町は、人情が篤いだけではありません。自然だって豊かです。春は、静峰公園の桜並木が美しく咲き乱れ、ご近所さん同士でお花見をしているお宅もあります。夏には、いたる所でホタルを見ることも出来ます。秋にはイチョウがきれいに色付いて、さらにその上、落ち葉を集めて焼きいもをふるまってくれたりする人も、ご近所に住んでいます。冬には古徳沼に白鳥がやってきて多くのカメラマンがシャッターチャンスを見はからっています。一年間、三六五日が宝物なんだと私は思っています。

最近よく、テレビなどで、近所などと仲が良くない、ましてや知らない人と挨拶をするなんて恐くてできない、というようなことを報じていますが、私にはよく理解できません。フィクションなのではと思ってしまう位です。それがこの国の現実なのだと分かった時には、本当に悲しくなりました。人は、人と繋がりがあってこそ「生きて」「いけるのだ」と思うのに、それを「血も繋がっていないし赤の他人」というような目で周囲の人を見て、自ら関係を断ち切っているのはどうなのかと思います。先日私は、学校の授業で「近所との交流が豊かな人の方が健康で澁刺と長生きできる」ということを知りました。私は瓜連町のおじいさんやおばあさんを見て、と

ても納得することができました。やはり一人では寂しい。周りに人が居てくれて、友好的な関係を築いてこそ楽しく元気に生きていけるのだと思います。

私は、自分の住んでいる町が大好きです。そしてその同じ町に住んでいる人も、町の内外にある自然も大好きです。もしも、私が大人になってこの町を離れることがあっても、この町以上に素敵な町に出会えることはきつと無いのだろうな、と思っています。

どんなにお店が少なくても、どんなに田んぼ道が多くても、どんなに小さな町でも、どんなに人口が少なくても、どんなに少子高齢化が進んでいても、どんなに交通手段が不便でも……この、温かくて、自然にあふれている私の町が一番大好きです。こんなにほのぼのした町で成長することができて、本当に良かったと思っています。殺伐としたニュースに接する度に、こんな町がもっとこの国で増えていけば良いな、と思います。絆と絆でしつかり結ばれている町が一つでも多く出来れば良いな、と思います。

決して都会とは言えない私の町ですが、私は今までこの町が嫌いだと思ったことはありません。むしろ好きでたまりません。こんなに自分の住んでいる町を好きでいられる事は、とても幸せなことだと思っています。

最後に、

「私が十七年間住んできた瓜連町は宝物です。」